

編集発行責任者 飯田 誠

〒125-8506 東京都葛飾区青戸6-41-2

TEL:03-3603-2111 (代表)

URL:<http://www.jikei.ac.jp/hospital/katsushika/>

INDEX

- 01. 診療科紹介(小児科)
- 02. 診療科紹介(小児科)、部署紹介(臨床工学部)
- 03. 部署紹介(臨床工学部)
- 04. 診療科紹介(泌尿器科)

診療科紹介 [小児科]

子どもの消化器内視鏡検査と消化器疾患の診療

小児科では、アレルギー専門医によるアレルギー疾患(食物アレルギーの診断と治療、アトピー性皮膚炎の最新治療)をはじめ消化器疾患(便秘、過敏性腸症候群、炎症性腸疾患など)、腎臓疾患(小児の腎生検も当院で可能です。)、低身長精査、甲状腺などの内分泌疾患など幅広い領域で専門診療を行っております。今回は子どもの消化器内視鏡検査と消化器疾患の診療についてご紹介いたします。

当科では都内でも数少ない、小児に対する消化器内視鏡検査(胃カメラ、大腸カメラ、小腸カプセル内視鏡検査)を行っています。内視鏡の施行は、内視鏡専門医の資格のある小児科専門医が施行し、麻酔も必ず検査担当とは別の小児科医が担当し、偶発症・合併症への対応にも備えております。また、必要に応じて内視鏡科、麻酔科、小児外科と協力して検査を行う体制を整えています。

お子様にとって苦痛のない検査と安全性を優先しているため、基本的には入院(1泊2日)で行なっています。大腸内視鏡の実施方法は図をご覧ください。

対象となるお子様の症状としては、繰り返す腹痛・嘔吐・下痢、長引く血便・黒色便、原因不明の体重増加



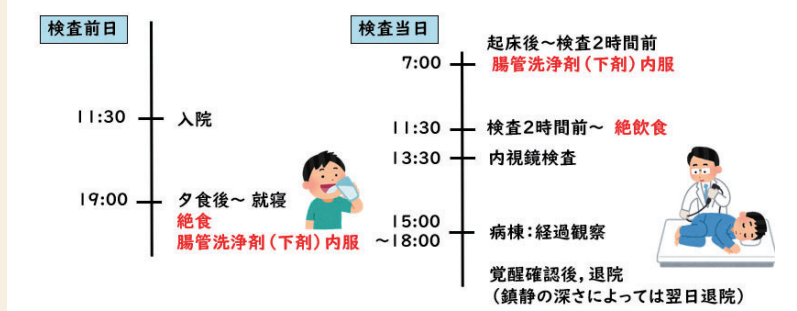
小児科診療部長
高島 典子

不良・体重減少・成長障害、繰り返す口内炎・痔瘻などがあげられます。これらの症状のお子様には、詳細な病歴の聴取を行い、血液検査、腹部エコー検査、便検査など苦痛の少ない検査を施行した上で、適応を十分検討し内視鏡検査を実施するようにしております。これにより、炎症性腸疾患、好酸球性胃腸炎などの疾患の診断が適切にされるようになります。令和5年度の検査実績は別記の通りです。

小児の消化器疾患は、慢性機能性便秘症、過敏性腸症候群（IBS）などが頻度の高い疾患として挙げられますが、近年小児でも潰瘍性大腸炎やクローン病などの炎症性腸疾患（IBD）が増加しており、成人同様に生物学的製剤を用いた専門的な治療が必要となる例もあります。またIBSや機能性ディスぺプシアなどの繰り返す腹痛や下痢症状、胃部不快感などを訴え、登校に支障を来たす小児も増加しております。当科では、小児栄養消化器肝臓病学会認定医2名（高畠、松岡）による消化器疾患の専門的診療を行っております。

慢性の便秘や長引く消化器症状に悩むお子様でお困りの場合は、当科にご紹介いただければ幸いです。どうぞよろしくお願いいたします。

当院小児科の大腸内視鏡検査の流れ



令和5年度の内視鏡検査実績 (18歳未満): のべ34件

- ・上部消化器内視鏡(食道・胃・十二指腸): 16件
- ・大腸内視鏡(大腸): 16件
- ・小腸カプセル内視鏡検査(小腸): 2件

部署紹介 [臨床工学部]

はじめに

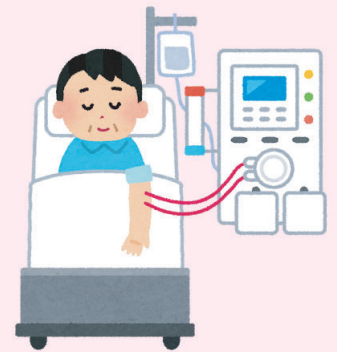
臨 床工学部は、10名の臨床工学技士が在籍し、主に機器管理業務、血液浄化業務、心臓カテーテル業務、手術室・集中治療室業務に従事しています。臨床工学技士は、医療機器の性能を最大限に活かすこと、また、医療機器を安全に使用していただくことを目的として、装置の操作やトラブル対応、保守・点検、使用者への教育などを行う専門の医療職です。

現在、生命維持管理装置の導入や医療機器のトラブル発生に備えて、週3日の宿直とオンコールにて24時間365日迅速に対応できる体制を整えています。

各業務紹介

・**機器管理業務** 院内で広く使用される輸液ポンプ、シリンジポンプなど、約220台の医療機器を、機器管理システムで管理しています。これにより、貸出・返却、保守情報などを一元管理し、その有効利用と安全性の確保に努めています。この他、病棟設置のセントラルモニタやAEDなどは、病棟スタッフと協力して、安全性の確保に努めています。また、使用するスタッフには、対面での勉強会やe-learningを配信するなど、知識と技能の向上に努めています。

・**血液浄化業務** 血液浄化部は、透析ベッド30床を保有し、外来で通院される維持透析の患者さん、これから透析を導入される新規導入の患者さん、入院して治療や検査が必要な患者さんに対し、血液透析を行っています。また、患者さんの命綱であるバスキュラーアクセスは、超音波診断装置を用いた管理を始め、血管内部の変化にいち早く気付けるよう活動しています。その他、血漿交換や血漿吸着などのアフレス治療や腹膜透析療法など多岐にわたる治療を行っています。



・**心臓カテーテル業務** 心臓カテーテル検査や狭心症、心筋梗塞の治療などのサポートを24時間体制で行っています。主な業務は、IVUS(血管内超音波)、OFDI(光干渉断層診断)などの診断装置やFFR(冠動脈予備機能)装置の操作、IABP(大動脈バルーンポンピング)、ECMO(体外式膜型人工肺)装置などの補助循環装置の準備・操作を行っています。最近では、冠動脈の高度石灰化病変の治療デバイスとして、ロータブレーター、ダイヤモンドバック、IVL(血管内石灰化破砕術)システムなどの機器を導入し、幅広い病変の治療が可能になっています。

・**集中治療室業務/手術部業務** 集中治療室では、主に人工呼吸器・ECMO・CRRT(持続緩除式血液濾過療法)装置など、生命維持管理装置の操作・管理を行っています。毎日開催する多職種カンファレンスでは、患者情報や治療方針などを共有し、安全で質の高い医療の提供に努めています。また、呼吸ケアチームの一員としても活動しています。このチームは、院内全域において、呼吸療法に関する質を高めること、また、医療事故を防止することを目的に組織されているチームです。ここでは、医療機器の専門職の視点で、安全使用と治療効果に注目して活動しています。

手術部では、医療機器トラブルを未然に防ぐことを目的に、手術開始前に安全ラウンドを行っています。また、手術中などに発生したトラブルにも迅速に対応できるよう体制を整えています。

最後に

各業務の遂行においては、各種の認定資格を有した専門性の高いスタッフが対応しております。医療機器に関する疑問などがございましたら、お気軽に声をかけてください。

当 センターでは、前立腺癌、腎癌、膀胱癌といった泌尿器悪性腫瘍に対して、手術療法、薬物療法、放射線治療を組み合わせた集学的治療を提供しています。また、前立腺肥大症や尿路結石症、骨盤臓器脱などの良性疾患にも力を入れており、患者さんに最適な治療を提案しています。今回は、前立腺肥大症に対する手術治療について当センターの取り組みをご紹介します。



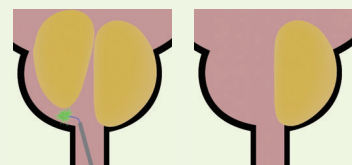
泌尿器科診療部長
山田 裕紀

前立腺肥大症に対する手術治療

前立腺肥大症(BPH)は、50歳以上の男性の約50%、80歳以上では90%近くの男性に見られる良性疾患です。加齢とともに前立腺が肥大し、尿道を圧迫することで排尿困難、頻尿、夜間頻尿、残尿感などの症状を引き起こします。当センターでは、BPHに対する手術治療として、経尿道的ホルミウムレーザー前立腺核出術(Holmium Laser Enucleation of the Prostate; HoLEP)、経尿道的水蒸気療法(WAVE: Water Vapor Energy Therapy)、従来法である経尿道的前立腺切除術(TURP)を実施しています。これらの手術法の特徴を以下にまとめました。

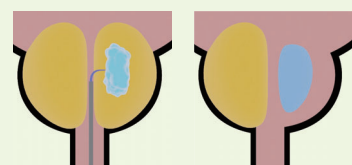
① 経尿道的前立腺核出治療

経尿道的ホルミウムレーザー前立腺核出術(HoLEP)は、肥大した前立腺組織をレーザーで核出する手術法です。



② 水蒸気による低侵襲治療

経尿道的水蒸気療法(WAVE治療)は低侵襲な前立腺肥大症の治療法で、Rezumシステムを用いて水蒸気を前立腺組織に注入し、対流熱によって前立腺組織を約70℃に加熱することで組織壊死を起こします。徐々に組織が縮小し、尿道の圧迫を軽減します。全身状態を考慮して従来の手術療法(TUR-P、HoLEPなど)が困難と思われる方に適用されます。



BPH治療法	経尿道的前立腺切除 TURP	ホルミウム前立腺核出術 HoLEP	水蒸気療法 Rezum
至適患者(前立腺容積)	小～中程度(30～80cc)	大きい前立腺(50cc以上)	小～中程度(30～80cc)
手術時間	60～90分	60～180分	15～30分
出血量	中程度	少ない	極めて少ない
入院期間	1週間	4～5日	1～2日
その他特徴	全国で広く行われている	再発率が低い	低侵襲

チーム医療と患者サポート

当科では、最新の技術を駆使し、患者さんの健康を第一に考えた診療を行っております。医師、看護師、リハビリスタッフが連携して患者さんに最適な治療を提供し、術後も早期の社会復帰を目指したサポートを行っています。お困りの際は、どうぞお気軽にご相談ください。